



日本の死生観に関する研究知見と課題：  
世代継承性概念による考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): views of life and death, circular views of life and death, relationship, generativity, narrative 作成者: 友居, 和美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00017262">https://doi.org/10.24729/00017262</a>

## 日本の死生観に関する研究知見と課題

### —世代継承性概念による考察—

友 居 和 美

大阪府立大学大学院生

#### 要 旨

今日、死は必ずしもタブー視する対象ではなくなってきたが、死生観は空洞化し、長寿化や医療の高度化に対応できているとは言い難い。そこで本稿では、死が身近にない人の死生観を先行文献から明らかにし、今後の研究の礎とすることを目的とした。

まず、わが国の死生観の変遷を振り返り、その特徴を農耕社会に由来する継承の意識に連なる円環的の死生観の中に見出した。次に、死が身近にない人の死生観研究を7分野（認識、心理、信仰・葬送、生、行動・思索、経験、終末期ケア）において分析し、家族や大切な他者との関係性に配慮する傾向を確認した。エリクソンの世代継承性概念は主体性と共同性をその動機の源とするが、円環的の死生観は象徴的不死性として出現する主体性、関係性への配慮は他者に必要とされる欲求として出現する共同性と捉えた。今後は「語る」意義に着目し、死について語る場の創出を通して死生観醸成を進めていくことが求められる。

キーワード：死生観、円環的の死生観、関係性、世代継承性、語り

#### 1. 問題と目的

フランスの歴史家Ariès（1975 伊藤・成瀬訳 1983）は、20世紀以降「死がタブー視」されていると述べた。現在の日本においても死に関わる話は忌避される傾向がある一方、いわゆる「終活」という言葉の流行をみると死のタブーから解放されたともいえる（澤井, 2005）。また、文部科学省（2012）は、現在の日本社会において死の実感が抜け落ちており「死」と向き合う経験が減少しているために死に直面した時の対応に苦慮する人が多いとして、死生観の学びを推奨している。厚生労働省は、最期の医療やケアについて家族や医療者等と話し合う取り組みである「ACP（アドバンス・ケア・プランニング）」を「人生会議」（厚生労働省, 2018）と称して啓発に努めている。

長寿化とそれを支える医療の高度化、さらに終末期の選択肢の多様化に伴い、我々が我が事や身内の問題として死について考えたり決定を迫られたりすることがある。しかし、職業として死に向き合う医療・介護関係者や哲学者、宗教家等を除いて、死を我が事として身近に感じられない人はどのような死生観をもって死を捉えているのだろうか。こうした問いに対して、本稿ではまず日本の死生観の変遷を振り返り、死生観研究の現状を概観する。そのうえで、晩年期の発達とは死への道のりに慣れ、死を覚悟をもって迎え、生と死に新しい意味を与える（Levinson, 1978 南訳 1992）ことであるという見地に立ち、発達の観点から考察を加えて今後の死生観醸成研究の礎とすることを目的とする。

## 2. わが国の死生観の変遷

まず「死生観」の定義である。辞書によれば「死生観」とは、「死あるいは生死に対する考え方。また、それに基づいた人生観」（松村，2006）であるが、文献においてはテーマに応じて先行研究の定義を引用しているものや研究者が独自に定義をしているものがある。死生観の定義は、概念の明確な定義づけが行われていないまま、さまざまな研究が行われてきたため、用語には厳密な概念規定がなく、ほぼ同一の概念として用いられている（小谷，2008）とされており、本稿では「死生観」を「死あるいは生死に対する考え方」と広く定義する。この定義のもと、日本社会の歴史の流れに沿って死生観の変遷を見る。

### (1) 古代から江戸時代

古代日本の死生観として、稲作を営む村社会において先祖崇拜の祭祀と田畑の相続は重要な責務であり、家の継承というシステムが確立される中で、死者は死後も生者に対して一定の影響力を持っていたとされる（島田，2016）。6世紀に仏教が伝来し、時代が中世に下ると飢饉や戦争、疫病による死の頻発によって厭世思想が支配的（山本，1992）となり、死後に永遠の安らぎが待っていることを約束する浄土教信仰が日本人の死生観の基本を作ることとなった（島田，2016）。

封建時代に入ると、儒教の影響下に発展してきた武士道が倫理体系を支えることとなる（山本，1992）。また、江戸末期の農村指導者である二宮尊徳は、農業の実体験に基づき、過去から受け継いだ種子を未来へ受け継ぐことで個人の営みは家というかたちでその連続性を確保されるとした（桐原，2009）。「家」における継承の円環的連続性によって、生の有限性に由来する別離や断絶という哀しみを、田畑などの資産として次世代へ継承することで救済しようとしたのである（桐原，2009）。一方、継承すべき資産を持たない者として、吉田松陰は「私の死を悲しんでくれるよりも私の志を受け継いで広めてくれるほうがもっとうれしい」（松浦，2011）と尊王攘夷の主張が継承されることに救済の道を見いだした。松陰は、死の先に何もない直線的な死生観ではなく人間の一生が四季のように円環として全体を成している（桐原，2009）と考えたのである。波平（2000）は、自分が価値を置いた対象に、生き残った人々が自分と同じ価値を見いだしてくれるように望むことが死にがいであり「継承のイデオロギー」であると述べているが、松陰の円環的の死生観はそれに相当するといえる。

### (2) 明治時代から第2次世界大戦

明治時代、修養家の加藤咄堂が『死生観』を著し日露戦争前後から「死生観」の語が定着していったが、加藤は、大乘仏教や日本の思想的伝統および西洋の近世哲学の一致するところに「死生問題」の解答が見いだされると述べた（島蘭，2012）。彼の「死生問題」は心を安定させ不動の心を養おうとする「修養」についての関心から導かれており、「修養」の要諦が「生死を達観する」とした（島蘭，2012）。この「修養」言説と新渡戸稲造の『武士道』が新しい時代の精神的欠落を埋める有望な精神的資源と見なされた（島蘭，2012）。こうした死生観の流れを、島蘭（2012）は修養の系譜と名付け、「死を意識しつつ、死を超える大いなるものに一体化し、死を恐れずに生きる」ことを理想とするものであるとした。これに対し志賀直哉らに代表される教養の系譜は、自らの死を強く意識した経験が、心の安らぎを得ることに、また確固たる信念をもつ文人・思想家・表現者としてのアイデンティティの確立に役立つものとされた（島蘭，2012）。こうした近代「知識人」の死生観に対して、日本のさまざまな地域の多くの住民の生活の深層にある死生観を自覚すべきだという考えから、柳田国男や折口信夫らに代表される民俗学的な死生観言説が登場する（島蘭，2012）。柳田は日本の生活者（常民）の文化の中で蓄えられてきた円環的永遠回帰的な死生観を著したが、それは世代間の連帯（団結）と理解することもでき、日本の「常民」の信仰や行動様式は、「イエ（家）」という単位集団に集約された「世代間の

連帯」の意識を結晶化させた（島藺，2012）。柳田は、日本の自然宗教の中からは絶対者は生まれてこないが、子孫を愛護しようとする意志は絶対者や彼岸の観念をも超えると考え（川田，1992）、古今にわたる縦の団結が未来に対する計画であり遺志であり希望であり愛情である（柳田，1990）と考えたのである。

やがて第2次世界大戦に突入すると、加藤咄堂が強調した武士道の精髓が戦地へ赴くものを激励し戦闘意欲を鼓舞するものとして語られ、内心の自由の禁圧によって個人の内面的な決断に関わるはずの死生観も外部から強要されるものとなった（石丸，2014）。

### （3）第2次世界大戦後から現在

再び死生観が注目される契機となったのは、加藤・ライシュ・リフトン（1977）による『日本人の死生観』であった（島藺，2012）。そこでは、リフトンの「象徴的不死」の概念を軸に6名の近代日本人の死生観に光を当てている。「象徴的不死」は、死という非継続性にもかかわらず、継続性を象徴化しようとする模索である（加藤他，1977）。取り上げられた6人はそれぞれに、自分の人生の重要な問題を象徴化して死と調和させ、個人と個人を超越する重要な結びつきを主張することで、死後も生き続ける道、つまり自分自身に象徴的不死性を与える道を開いた（加藤他，1977）。

そして戦後の復興を遂げたころから、死生観の変容が指摘される。井上（1973）は、「戦無派」の若者たちにとってはレディメイドの「死にがい付与システム」は存在せず、「教養のレパートリー」の中にもそれを見いだすことは難しいとして、「死にがいの喪失」と名付けた。また、上述したリフトンの象徴的不死性の意識が相対的に希薄になり、輪郭の薄い生と死の間の境界が消失していると指摘されている（森下，2009）。さらに、竹之内（2013）は、終末期の選択肢は増加しているにもかかわらず、選択の基盤となるべき価値観・死生観はむしろ貧弱になっていると述べている。こうした傾向を広井（2001）は死生観の「空洞化」と呼び、その結果、自身の死を見つめ死について思索を深めるといふ課題がなおざりにされる（竹之内，2009）に至っている。

以上、古代から今日に至る死生観の変遷を時代背景とともに見てきた。日本人は古くから稲作を主たる生業とし、先祖崇拜の祭祀と田畑の相続をイエ制度の中で継承してきた。この継承の意識は日本人の心に連綿と生き続け、時代を下って二宮尊徳や吉田松陰、さらには柳田国男らの円環的死生観に結実することになる。しかし、加藤咄堂が「死生観」の用語を定着させた近代以降、知識人の死生観や戦時下に国威発揚のために喧伝された死生観は顕在化したのが、今日では死生観は空洞化するに至っている。

## 3. 死生観をめぐる研究の現状

以上、日本の死生観の変遷をみてきたが、次に現在の死生観がどのように把握されているかを概観する。上述したとおり、文部科学省や厚生労働省は、国民が死生観を学ぶことや最期について語り合うことを求めていることから、ここでは、職業として死と関わることなく自身の健康上も死が身近にない成人を対象とする研究に絞って検討する。

死生観の研究は、死に対する態度という概念の定義が曖昧であるため、概念と先行研究が一致していない可能性（田中，2013）が指摘されている。そこで、先行研究の対象領域を、死生観尺度と死生観構造の研究を通じて明らかにする。まず、死生観尺度を取り上げる。平井（2000）は7つの因子（死後の世界観、死への恐怖・不安、解放としての死、死からの回避、人生における目的意識、死への関心、寿命観）からなる尺度を構成し、そのうち「死後の世界観、死への恐怖・不安、解放としての死」を日本人の死生観の主要構成要素とした。これは死の否定的側面だけでなく「人生における目的意識」という肯定的側面の因子を含む多次元的・包括的な尺度といえる（平井，2000）。丹下（1999）は、青年を対象にして「死に対する恐怖、生を全うさせる意志、

人生に対して死が持つ意味、死の軽視、死後の生活の存在への信念、身体と精神の死」の6因子からなる死の態度尺度を構成した後、「死の軽視」を除く5因子を中高年者に適用可能とした（丹下・西田・富田・安藤・下方 2013）。

次に死生観の構造を取り上げる。丹下（2002）は、中高生とその家族を対象に「死」から連想される語を自由記述形式で問い、死生観の構造を明らかにした。そこで死についての7つのカテゴリー（具体的な死の種類、死の文化的側面、死に対する態度、関係の中で起こりうる死、死のイメージ、客観的な性質、その他）と生についての2つのカテゴリー（生きる、生と死についての思索）が抽出された。これら反応語は、個人の内部に蓄積された我が国固有の文化的要素を反映したものと、個人の態度や信念、経験、意味、価値などを反映したものが混在している（丹下、2002）とされている。また、深澤・高岡・根本・千葉（2010）は、高齢者に対する面接調査から、死生観を「苦痛緩和、死の準備、延命は望まない、終の棲家、死後の世界、平安なる死、死の恐怖感」の7カテゴリーに分類した。さらに、彦・田島（2011）は、高齢者を対象にした文献研究から、文献内容を「死に対する思い、死への準備、健康レベル別に分けた死生観、死をふまえて生を見る・スピリチュアリティ、終末期ケア」に分類した。

以上の死生観の研究方法は質的・量的・文献レビューであること、対象者が青年から高齢者にまたがっていることから網羅的であり、死生観研究の検討領域を定めるひとつの指標になると考える。よって、上記の因子・カテゴリーを分析し次の6つの分野にまとめた。第1は「認識」とし、死のイメージや死に対する態度・思いなど、死をどのように捉えているかを扱う分野である。第2は「心理」とし、死に対する恐怖感や不安などを対象にする。第3は「信仰・葬送」とし、死後の世界観や靈魂、スピリチュアリティを対象とする。第4は「生」とし、生きることや生き方、人生において死が持つ意味など生に焦点を当てる。第5は「行動・思索」とし、死の準備行動を対象とする。第6は「終末期ケア」とし、終末期における医療やケアについての考え、死因や死ぬ過程、最期の場所などを対象とする。以降、この6分野について、死が身近でない成人の死生観を調査した研究を概観する。

## (1) 認識

死に対する認識は、まずイメージとして捉えられる。死はマイナスイメージで回避できない自然現象（長崎・松岡・山下、2006）であり、「苦しいだろう」「どんな体験もできなくなる」「身内や友人が悲しむ」（森末、2003）といった負の側面が強調される。負の側面の一端である死のタブー視は時代的背景の影響を受け60歳代以上に多くみられた（丹下他、2016）という報告がある一方、肯定的側面とも言える「死が美化・誇張されている」という意見が半数を超えた（堀、1998）という調査もある。

次に、死の認識として周囲との関係性を意識した本音と建て前の乖離や迷惑についての言及がある。たとえば、終末期医療に対して中年世代は自己主張をするのに対し高年世代は家族や行政に遠慮するという傾向があり、一般論や家族の負担を考えた場合には病院での死を受け入れるが、本音は「自宅で死にたい」という願望がある（山崎・千葉、2000）という。また、いわゆる「ぼっくり死願望」が多い背景には家族に迷惑をかけたくないという思い（小谷、2004）があることも指摘されている。こうした関係性の中で認識される死は、その主体が自分か他者かという人称による差異にも表れる。小谷（2007）は、親密な他者を特定して死生観を考察し、一番大切な人が「子ども」である場合に死の恐れや逃避の意識が最も強いなど、同じ家族の中でも大切な人が誰かによって死観に違いがある（小谷、2007）とし、自分の死よりも大切な人の死が恐く、「自分は死んだら消滅するが、大切な人は死んでも消滅しない」と考えている（小谷、2008）とした。関係性の中で死をどう認識するかは、死の正負のイメージを左右し、望む死の方にも影響するといえる。

## (2) 心理

デーケン(2011)は、「死への恐怖には、自己の有限性を自覚させ、創造性を発揮させる機能がある」と述べたが、心理学分野において死の恐怖や不安についての研究が豊富である。恐怖・不安の対象は、年齢層、性別を問わず病気の進行に伴う身体的苦痛が大きく（小谷，2004；長崎他，2006）、若い年齢層ほど遺族の経済・精神的問題に不安を持ち（小谷，2004）、20～30歳代は「自己の存在消滅」など認識面の不安が多い（長崎他，2006）という報告がある。年代別では、青年期ほど恐怖感が大きく（富松・稲谷，2012）、成人中期から加齢とともに低下する（堀，1998；丹下他，2016）。加齢とともに恐怖が低下する理由は、これまでの自分の人生を受け入れ、失敗があっても自分の人生には何も問題はないと確信したときに恐怖が収まる（Nakagi & Tada, 2014）という解釈がある。

こうした年齢による差異は、発達段階に着目した研究にも見られる。Nakagi & Tada (2014) はエリクソン心理社会的段階目録を用いて調査を実施し、成熟期の発達課題である統合性は目の前にある死から逃げずに受け入れることを促し、統合性の達成が全人生を受け入れる態度につながることを明らかにして、アイデンティティの発達段階が死への態度に関連するとした。

一方、死生観の育成については、親近者の死によって死生観が形成されていく（森末，2003）という報告や、死生観醸成の段階を明らかにしたもの（友居，2020）がある。この分野に焦点化した研究は少ないが、死生観醸成の機会を持つことや知識の普及啓発（石川・福井・澤井，2014）、死の準備教育（長崎他，2006）などが今後の課題として提示されている。

## (3) 信仰・葬送

死後観をめぐる先行研究は多くあり、死後の世界や靈魂を信じる比率は男性よりも女性が、高齢者よりも若い世代のほうが高い（小谷，2008；森末，2003；富松・稲谷，2012）、重要な他者との死別経験のある人のほうが靈魂の永続性を信じ死後の存在を信じる傾向が高い（富松・稲谷，2012）という報告がある。また、遺体をどのように捉えるかということは靈魂や死後観と関連すると思われるが、田代（1993）は変化しつつある死生観の中でも特に遺体観の変化が著しいとした。つまり、生物学的な死後、文化的には徐々に死んでいくという日本的な死生観が崩壊しつつあり、欧米並みに生死の融合を切り離していく傾向が脳死—臓器移植や献体、葬送方法と関連していると指摘されている（田代，1993）。

葬送方法に関して、伊野（2006）は家族の個人化という変容の中、家規範から外れた人が葬送の方法を選択する過程で死生観を構築していくプロセスを明らかにした。葬送の選択は死生観に基づくことが多いとしたうえで、葬送の担い手を確保できない人は必ずしも特定の死生観から葬送の形を選択しているのではなく、他人への迷惑回避や合理的経済的理由から葬送を選択し、その葬送に適合的な死生観を構築しているとした。また、現在でも家墓規範は存在するが、同時に自分らしい葬儀のあり方を考える人がおり、祖先祭祀の規範が緩んでも親密な他者を悼む儀礼を否定しないことを実証した。信仰・葬送に関しては、変化が著しい部分と不変の部分があるといえよう。

## (4) 生

Frankl (1947 山田・松田訳 1993) は、「死によって生きる意味を実現することができる」と述べたが、死の認識が生に及ぼす影響を検証した研究がある。田口・三浦（2012）は、高齢者を対象に生への価値観を測定するPurpose-in-life Test日本語版、死に対する態度を測定するDeath Attitude Profile短縮版、主観的幸福感を測定するSatisfaction With Life Scaleの3つの尺度を用いた調査の結果、人生における意味・目的意識が明確

な人は死の恐怖が低く、現世からの回避を期待せず幸福感が高いことを明らかにし、生の充実が死の不安を低下させるとした。

伊野（2006）は、インタビュー調査の対象者が、死と向き合う中で生き方そのものを再考し、それを契機として自らの生をポジティブに捉え直していると指摘した。たとえば、死を考えることで清々しい気分になり精一杯生きていこうと思ったという語りを紹介している。そして、葬送の選択を通して、自分がどういう人間なのか、何を大切に生きているのか、これからどう生きていきたいのかを親密な他者と自分自身に言い聞かせている（伊野，2006）とした。

また、丹下他（2016）は「死に対する尺度」（丹下，1999）をもとに縦断調査を行い、「生きる」ことに対する積極的な姿勢は成人中期でも見られるが、年齢を重ねるにつれて死を人生の一部として捉えその肯定的意味を認識するようになるとして、死は人々に若干の否定的な感情を起こさせつつも、同時に生きることへの積極的・肯定的な影響を与えると述べた。死についての認識は生に対して概ね肯定的な影響を及ぼすことが確認されたが、これは次の死についての思索にもつながるであろう。

## （5）行動・思索

ここでは死について考える、話す、行動することに焦点を当てる。死について考える頻度は、30歳代（森末，2003）及び40～50歳代（堀，1998）で低く、高齢者では7割近い人が「よく」あるいは「時々」考えている（吉田，2010）という結果がある一方、死について考えたことがない無関心層の存在（友居，2019）も指摘されている。また、50～60歳代で希望する最期の場所について考えたことがない者は死と向き合うことを回避する傾向がある（杉野・秋山，2017）とされた。

また、他者と死について話すことについて、中高年ほど「オープンに」死を話題にする率が高い（堀，1998）という結果があり、自分の思いを親密な他者に語る時には彼らを説得し自分自身にも言い聞かせている（伊野，2006）と報告されている。一方、家族への配慮が遠慮や気兼ねとなり、自己を抑制し、本音を語り合おうとするコミュニケーションを避けてしまう高年世代が多く、自分の終末期をめぐる家族とのコミュニケーション不足（山崎・千葉，2000）も指摘されている。これに関して、エンディングノート作成を通して高齢者の死の準備行動を分析した木村・安藤（2015）は、他者と死に関して話すことが難しいからこそ「死の準備行動」を取るのだという解釈をした。高岡・伊藤・深澤（2010）は、元気高齢者に対するインタビュー調査から、高齢者が死を考える時は死と自らの人生課題について考える必要があること、高齢者同士が死について話し合いをすることで他者の経験がわかり学習機会が増えることなどを明らかにし、死について語る機会だけでなく方向づけの必要性を強調した。

死の準備行動は年齢が高い人ほど取り組みが進み（荒木・堀内・浅野，2010）、50歳以上の人は体調や加齢を機に死を意識することに伴って死の準備行動の進展がみられる（長崎他，2006）とされる。死の準備行動の内容は多岐にわたるが、木村・安藤（2015）は、死の準備行動を「過去－将来」、「感情的－事務的」の座標上に配置し、事務的なものは取り組みやすく感情的なものは困難であること、明るい将来展望や目標についての検討は主観的幸福感を高めるが、老いや病の想像は暗いものとして思考が回避されるため「死の準備行動」が停滞する（木村・安藤，2015）と述べている。しかし、死の準備行動の意図するところは、希望を残すことではなく、他者に迷惑をかけないように自分の出来ることを選択し残すことであり、他者が困らないように手立てを講じることによって安心感や達成感を得て、不安から解放される（木村・安藤，2015）としている。死について考える、話す、行動するという3つの行為については、着手順序や前提とする行為など相互関連がありそうである。

## (6) 終末期ケア

以上は、過去の経験や現在の認識や行動であったが、終末期ケアは将来の想定問題であり、特に重要なものは最期の場所と死に方である。最期の希望療養場所は、40歳以上を対象とした調査では自宅（石川他, 2014）、60歳以上を対象とした調査では自宅または子どもの家（荒木他, 2010）と年代による影響もあるほか、病院、ホスピス、自宅と分散していることも明らかになっている（友居, 2019）。在宅死をめぐるには、配偶者に介護をしてほしいという願望（石川他, 2014；田中・岩本, 2002）や、自宅の自由な環境（石川他, 2014）への愛着がある一方、身内への負担を回避したいという配慮もあることから家に対する愛情の二面性の表れ（友居, 2019）という指摘もある。また、病院死が多い現状を肯定的に捉える一方、自分や親の最期は在宅死を望むという一般論と本音の乖離（山崎・千葉, 2000）も指摘された。

次に、特に日本文化の中では決定的に重要である（加藤他, 1977）とされる死に方について取り上げる。小谷（2004）は、いわゆる「ぼっくり死」と少しずつ死に向かうことを比較し、前者を望む理由は「家族に迷惑をかけたくない」「苦しみたくない」からであり、後者を望む理由は「死ぬ心積もりをしたい」からであるとした。また、終末期医療を希望する人はほぼ半数で、痛み止めや点滴などは多くの人が希望するが経管栄養や人工呼吸器を希望する人は少ない（吉田, 2010）ことが明らかになった。死に方や最期の場所問題は重大な課題であると同時に世間での情報量が多く、容易に答えを出すことが困難な課題である。

以上、死が身近でない成人の死生観を調査した研究を概観した。特徴的なのは、6分野すべてにおいて、家族や大切な他者との関係性に言及されていたことである。これは前段の死生観の変遷では見られなかった傾向であるが、それは関係性が軽視されていたからではなく、むしろ農耕社会や儒教を背景とする封建社会、近代社会においては当然の前提であったからかもしれない。それをあえて言及するところに、現在の死生観の特徴が見られる。

## 4. 世代継承性概念によるわが国の死生観の考察

死生観の歴史の変遷と現状をみてきたが、時代を超えて通底していた継承の意識と、現在の死生観に特徴的な関係性について、人の発達の観点からどのように捉えられるか検討する。やまだ（2000a）は、死は一回限りの個人の人生だけをみれば喪失で終わるが、より大きい世代サイクルの中で見ると喪失から生成へ変換する力を生み出すという。この生成から次世代に伝える継承の概念はEriksonが成人中期の発達課題としたgenerativity（Erikson, E.H., Erikson J.M., & Kivnick 1988 朝長 正徳・朝長 梨枝子訳 1990）に相当する。generativityは、次世代の創生とケアを意味し、子どもを育てるだけでなく職業を通じて社会に貢献し、次の世代を育てること、社会そのものを発展させることを含む概念である（岡本, 2018）。訳語は「生殖性」「世代継承性」「生成継承性」などがあるが、ここでは以下「世代継承性」と表記する。

McAdams & Aubin（1992）は世代継承性を7つの特徴に分けてその構成を明らかにした。最初の段階で、世代継承性の動機づけの源となるものの一つが内的欲求であり、それは象徴的不死の欲求と他者に必要とされる欲求から成る。これらはそれぞれ、Bakan（1966）が人間の基本的な動機傾向と位置付けた主体性（agency）、共同性（communion）から派生しているとMcAdams & Aubin（1992）は述べている。

まず、主体性に注目してみる。主体性は象徴的不死の欲求として出現し、自己を主張し、拡大し、発展させる傾向を持つ（McAdams & Aubin, 1992）。象徴的不死性は、吉田松陰の「死して不朽」（松浦, 2011）という言葉に凝縮されており、加藤他（1977）は、個人および個人を超越する重要な結びつきを主張することは、死後も「生き続ける」道つまり象徴的不死性を与える道を開くためであると述べた。また、現代に至っては、近代合理主義教育を受けた人は現世の生だけが存在するという死生観に立っており、自己の死後もその仕事が



存続することを願って配慮する（宮家，2000）という自己の主張がみられる。また、田代（2016）は、死後に自分と関係する何か生き続けることは「死を超えた希望」となりうるが、現代的な「死にゆく過程」は、死にゆく本人が主体的に生き舞台の上で役割を全うすることを要請する一方、終局に向かうほど本人の主体性を発揮しえない場面が生じてくるという実態を分析している。

死生観の変遷の項でみたとおり、日本人の意識の底に流れる農耕社会由来の土地の相続や家の継承は、時代を経て二宮尊徳や吉田松陰さらには柳田国男の円環的死生観として表出したが、これらは主体性の側面をもつといえるだろう。また、『日本人の死生観』（加藤他，1977）で取り上げられた近代知識人の象徴的不死性にも顕著に見られる。

次に述べる共同性は他者に必要とされる欲求として、愛し、ケアをし、他者と親密に関わるという傾向を持つ（McAdams & Aubin, 1992）。やまだ（2000b）は、死は死にゆく個人のものではなく、共同体のなかで意味づけられてきたと述べ、近藤（2010）は、自分の死を自身にとっての意味に留まらず、他なる内の自己と、自己の内なる他を同時に考えることに「死生の真実」があるとして関係性の中の死について述べた。一方、竹之内（2007）は、死をめぐる現今の特徴として、血縁・地縁的な絆の切断や生者と死者の分離など「間」へのまなざしの喪失を指摘し、新谷（2000）は、死・葬・墓をめぐる動向として、散骨や自分らしい死に方への希求を家族や社会との絆を無視する「死の私事化」であると述べている。こうした共同性に対する危機感がある反面、澤井（2015）は、2000年代以降、死の自己決定が「管理対抗的」なものから「関係配慮的」なものに変化してきていると述べる。自分の死後、遺族が困らないよう配慮することは、親しい者との関係を維持したいという希望の表れであるが、「配慮」は「遠慮」に転化し、遺族の選択を制限し負担を強いることもあるという。

本来、共同性の傾向が適度に作用すれば、親密な関わりの中での愛情やケアに向かうはずであるが、過度に振れた場合は負の作用をもたらす場合もあるだろう。これは先行研究においても、死について周囲との関係性を意識した迷惑への言及がみられたこと、負担回避の理由から葬送の形を選択していること、家族への遠慮や気兼ねが自己を抑制し本音を語り合うコミュニケーションを困難にしていたこと、が確認された。

共同性は、農耕社会を基礎としてきた日本人には綿々と受け継がれてきた意識であろう。しかし、近代合理化や個人化の浸透によって主体性意識が強まる中、地縁・血縁の希薄化に伴う共同性意識の希薄化は、改めて共同性の意義を再認識させようとしているように見える。広井（2001）は、現代日本で死生観が「時代の問い」になったと述べたが、その意味で現代は主体性と共同性のバランスが問われている時代なのかもしれない。

さらに、McAdams & Aubin（1992）は世代継承性の7つの特徴の最終段階として「物語ること（narration）」を位置付け、人は人生に統一性、目的、意味を与えるような物語を形づくることで社会の中での自分を定義するとした。やまだ（2000a）は、われわれは物語モードで生きているため人生は「物語」として研究されねばならないと述べ、Giddens（1991 秋吉・安藤・筒井訳 2005）は、特定の物語を進行させる能力のなかにアイデンティティがあると述べている。その意味では、死生観を「語る」ことによって再帰的に自らの死生観が形作られるといえるかもしれない。伊野（2006）が述べたように、自分の思いを親密な他者に語ることで彼らを説得し自分自身にも言い聞かせるというのはその例であろう。一方、家族への遠慮や気兼ねが語りを抑制する傾向もあり、死について語る困難が「死の準備行動」に向かわせているとの指摘（木村・安藤，2015）もあった。

この世代継承性の概念は人生の満足度や幸福感などと正の相関があるとされており（McAdams, Hart, & Maruna, 1998）、複数の調査結果において幸福感との強い結び付きが指摘されている（竹内，2012）。また、世代継承性のうち象徴的不死性の満足度が幸福（well-being）に関与している（Huta & Zuroff, 2007）との指摘もある。先行研究で述べた死と向き合うことが生を肯定的に捉えることを促すということの裏付けになろう。

以上、世代継承性の観点から死生観を見てきた。農耕社会に由来する日本の継承の意識と近年特に注目され

る関係性への配慮は現代日本の死生観を説くキーワードになりえるだろう。現代日本の空洞化する死生観の様相を整理する一助となったと考える。

## 5. 課題と展望

わが国における死生観の変遷と現状を概観し、世代継承性の観点から考察を加えた。日本人の死生観は古今を通じて巨視的には継承の意識を内包してきたと言えるが、主体性と共同性を動機とする世代継承性の概念に沿えば、現在は共同性に対して主体性に比重が偏る反面、共同性への希求が顕著化している。その意味では、現代は死生観変遷の過渡期の時代と言えるかもしれないが、医療技術の進歩や家族形態の変化は我々が固有の死生観を醸成することを要請しているといえよう。

Eriksonは世代継承性（generativity）の対立テーマを停滞とし、老年期に必要とされず役に立たないと感じられると停滞の感覚がやってくるが、人が生み育てること（generativity）、新しいものを生み出すこと（creativity）、他の人を大切にしたり世話をしたりすることから完全に退いてしまうなら、それは死よりも始末が悪い（Erikson E.H., & Erikson J.M., 1982 村瀬・近藤訳 2001）と述べている。世代継承性に裏付けられた死生観は、次世代に繋がる新しいものを生み出し、それが主体に幸福感をもたらす可能性もある。死を単なる喪失で終わらせるのではなく、そこに生成に繋がる力を見出すことが、現代の死生観のひとつのあり方ではないかと考える。

ただ、人が死を意識する契機の多くは大切な人の死であるという研究結果は死を思索する機会の乏しさを示しており、死が身近でない人の死生観の醸成は容易ではない。先行研究からは、死について語ることの困難や遠慮、コミュニケーション回避が報告された。これに対して、世代継承性をもたらす幸福感や満足感などの肯定的な側面に期待し、「物語る」こと（McAdams & Aubin, 1992）によって社会の中での自分を定義しアイデンティティを見出すことに注目したいと考える。そしてそれは一人語りではなく、他者と共に自らの人生を再帰的に語ることから死についての思索を始めることを提案する。その中で、自らが死後も生き続けるという象徴的不死性を備えた主体性と、他者との語り合いを通して、自己を迷惑をかける存在ではなく必要とされる存在として認識し直すことで得られる妥当な共同性を兼ね添えた死生観醸成が促進されていくと考える。それは死を焦点化する死生観ではなく、生きることに焦点化する死生観になるだろう。今後はそうした「死について語る場」の創出について検討していきたいと考えている。

## 付記

本論文にまとめるにあたり、ご指導いただきました田垣正晋先生に心よりお礼を申し上げます。

## 引用文献

Ariès, P. (1975). *Essais sur L'histoire*. Paris: Éditions du Seuil.

（アリエス, P. 伊藤 晃・成瀬 駒男（訳）（1983）. 死と歴史 みすず書房）

荒木 亜紀・堀内 ふき・浅野 祐子（2010）. 地域在住高齢者の終末期の過ごし方の希望とその準備に関連する要因の検討 日本在宅ケア学会誌, 14 (1), 78-85

Bakan, D. (1966). *The duality of human existence: Isolation and communion in Western man*. Boston: Beacon Press.

デーケン, A (2011). 死とどう向き合うか NHK出版

Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W.W.Norton & Company.

- （エリクソン，E. H. エリクソン，J. M. キヴニック，H. Q. 朝長 正徳・朝長 梨枝子（訳）（1990）. 老年期 みすず書房）
- Erikson, E.H., & Erikson, J.M. (1982). *The life Cycle Completed: A Review*. New York: W.W. Norton & Company Inc.
- （エリクソン，E. H. エリクソン，J. M. 村瀬 孝雄・近藤 邦夫（訳）（2001）. ライフサイクル、その完結 みすず書房）
- 深澤 圭子・高岡 哲子・根本 和加子・千葉 安代（2010）. A地域の高齢者が考える自らの終末期 名寄市立大学紀要, 4, 63-68
- Frankl, V. E. (1947). *Trotzdem Ja zum Leben sagen*. Wien: Franz Deuticke.
- （フランクル，V. E. 山田 邦男・松田 美佳（訳）（1993）. それでも人生にイエスと言う 春秋社）
- Giddens, A. (1991). *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Oxford: Polity Press.
- （ギデンズ，A. 秋吉 美都・安藤 太郎・筒井 淳也（訳）（2005）. モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会 ハーベスト社）
- 平井 啓・坂口 幸弘・安部 幸志・森川 優子・柏木 哲夫（2000）. 死生観に関する研究——死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—— 死の臨床, 23 (1), 71-76
- 彦 聖美・田島 祐佳（2011）. 高齢者が捉える生と死に関する文献検討 ホスピスと在宅ケア, 19 (1), 42-49
- 広井 良典（2001）. 死生観を問い直す ちくま新書
- 堀 薫夫（1998）. 中高年層の老いと死への意識の構造 大阪教育大学紀要第IV部門：教育科学, 47 (1), 153-164
- Huta, V., & Zuroff, D. C. (2007). Examining Mediators of the Link between Generativity and Well-being. *Journal of Adult Development, 14*, 47-52.
- 伊野 真一（2006）. 家族の個人化と死生観 死生学研究 7, 354-370.
- 井上 俊（1973）. 死にがいの喪失 筑摩書房
- 石川 孝子・福井 小紀子・澤井 美奈子（2014）. 武蔵野市民の終末期希望療養場所の意思決定に関連する要因 日本公衆衛生誌, 61 (9), 545-555.
- 石丸 昌彦（2014）. 日本人の死生観 石丸 昌彦（編著）死生学入門（pp.41-60）放送大学教育振興会
- 加藤 周一・ライシュ，M.・リフトン，R. J.（1977）. 日本人の死生観（上・下）岩波新書
- 川田 稔（1992）. 柳田国男—「固有信仰」の世界 未来社
- 木村 由香・安藤 孝敏（2015）. エンディングノート作成にみる高齢者の「死の準備行動」応用老年学, 9 (1), 43-54
- 桐原 健真（2009）. 日本人の死生と自然 清水 哲郎（監修）岡部 健・竹之内 裕文（編）どう生きどう死ぬか（pp.185-202）弓箭書院
- 近藤 恵（2010）. 関係発達論から捉える死 風間書房
- 小谷 みどり（2004）. 死に対する意識と死の恐れ Life Design Report, 5, 4-15.
- 小谷 みどり（2007）. 中高年の「大切な人の死」観 ホスピスケアと在宅ケア, 15 (3), 241-246.
- 小谷 みどり（2008）. 中高年の死観—自己と大切な人の死観の比較— 日本家政学会誌, 59 (7), 287-294.
- 厚生労働省（2018）. ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の愛称を「人生会議」に決定しました 平成30年11月 [https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_02615.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_02615.html)（2020年5月30日）
- Levinson, D. J. (1978). *The Seasons of a Man's Life*. New York : Knopf
- （レビンソン，D. J. ライフサイクルの心理学 上 南博（訳）（1992） 講談社）

- McAdams, D. P., & Aubin, E. (1992). A Theory of Generativity and Its Assessment through Self-report Behavioral Acts and Narrative Themes in Autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62 (6), pp.1003-1015.
- McAdams, D. P., Hart, H. M., & Maruna, S. (1998). The Anatomy of Generativity. In McAdams, D. P., & Aubin, E. (Eds.) *Generativity and Adult Development: How and Why We Care for the Next Generation*. pp.7-43, Washington, DC: American Psychological Association.
- 松浦 光修 (2011). 新訳留魂録 吉田松陰の「死生観」 PHP研究所
- 松村 明 (2006). 大辞林第3版 三省堂
- 宮家 準 (2000). 生きがいと死生観 宮田 登・新谷 尚紀 (編) 往生考 日本人の生・老・死 (pp.256-262) 小学館
- 文部科学省 (2012). 長寿社会における生涯学習の在り方について 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112_1.pdf) (2020年5月30日)
- 森下 直貴 (2009). 〈無形のものたち〉のリアリティー 日本人の死生感の現在 死生学研究, 11 (S1), 57-79.
- 森末 真理 (2003). あなたと死 —非医療従事者の死に対する意識調査 川崎市立看護短期大学紀要, 8 (1), 67-76.
- 長崎 雅子・松岡 文子・山下 一也 (2006). 年代および性別による死生観の違い 島根県立看護短期大学紀要, 12, 9-18.
- 波平 恵美子 (2000). 継承のイデオロギー 宮田 登・新谷 尚紀 (編) 往生考 日本人の生・老・死 (pp.264-275) 小学館
- Nakagi, S., & Tada, T. (2014). Relationship between identity and attitude toward death in Japanese senior citizens. *The Journal of Medical Investigation* 61 (1, 2), 103-117.
- 岡本 祐子 (2018). 21世紀のアイデンティティと世代継承性 —その視点と課題— 岡本 祐子・上手 由香・高野 恵代 (編著) 世代継承性研究の展望 —アイデンティティから世代継承性へ— (pp.3-19) ナカニシヤ出版
- 澤井 敦 (2005). 死と死別の社会学 青弓社
- 澤井 敦 (2013). 死の社会的変容 山岸 健 (編) 希望の社会学 (pp.217-231) 三和書籍
- 澤井 敦 (2015). リキッド・モダン社会のなかの死別 澤井 敦・有末 賢 (編著) 死別の社会学 (pp.54-80) 青弓社
- 島田 裕己 (2016). 日本人の死生観と葬儀 海竜社
- 島蘭 進 (2012). 日本人の死生観を読む —明治武士道から「おくりびと」へ 朝日新聞出版
- 新谷 尚紀 (2000). 現代社会と死の問題 宮田 登・新谷 尚紀 (編) 往生考 日本人の生・老・死 (pp.140-144) 小学館
- 杉野 美和・秋山 智 (2017). 自己の死への意識から見えた非医療従事者の死生観 —平井らの死生観尺度を用いて— 広島国際大学看護学ジャーナル, 15 (1), 31-46.
- 田口 香代子・三浦 香苗 (2012). 高齢者の生への価値観と死に対する態度 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 14, 57-68.
- 高岡 哲子・伊藤 美和・深澤 圭子 (2010). 在宅で暮らす元気高齢者がもっている死に対する思い 名寄市立大学紀要, 4, 55-62.

- 竹之内 裕文 (2007). 「看取り文化」の再構築へむけて 清水 哲郎 (編) 高齢社会を生きる (pp.95-116)  
東信堂
- 竹之内 裕文 (2009). 死すべきものとして生きる 清水 哲郎 (監修) どう生きどう死ぬか (pp.95-116)  
弓箭書院
- 竹之内 裕文 (2013). 「自然な死」という言説の解体 安藤 泰至・高橋 都 (責任編集) シリーズ生命倫理学  
第7巻 終末期医療 (pp.126-142) 丸善出版
- 竹内 一真 (2012). 「経験の伝承」における生涯発達の視点からの先行研究の検討 —generativity 研究に焦点  
を当てて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 58, 383-395.
- 田中 愛子・岩本 晋 (2002). 老年期に焦点をあてた死生観終末期医療に関する意識調査 山口県立大学看護  
学部紀要6, 119-125.
- 田中 美帆・齊藤 誠一 (2013). 生と死に対する態度決定の概観と展望 神戸大学人間発達環境学研究科紀要,  
7(1), 181-186.
- 丹下 智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性 心理学研究, 70(4), 327-  
332.
- 丹下 智香子 (2002). 「死」からの連想語のKJ法による分類 名古屋大学教育学部紀要, 49, 157-168.
- 丹下 智香子・西田 裕紀子・富田 真紀子・安藤 富士子・下方 浩史 (2013). 成人中後期における「死に対する態度」  
の縦断的検討 日本老年医学会雑誌, 50, 88-95.
- 丹下 智香子・西田 裕紀子・富田 真紀子・大塚 礼・安藤 富士子・下方 浩史 (2016). 成人中・後期における「死」  
に対する態度の縦断的検討 発達心理学研究 27(3), 232-242.
- 田代 順 (1993). 死に関する意識調査 医療従事者と一般成人の比較 生命倫理, 3(1), 58-65.
- 田代 志門 (2016). 死にゆく過程を生きる 世界思想社
- 富松 梨花子・稲谷 ふみ枝 (2012) 死生観の世代間研究 久留米大学心理学研究, 11, 45-54.
- 友居 和美 (2019). 地域住民に対するアンケート調査からみた希望する最期の場所と在宅死評価の二面性 ホ  
スピスケアと在宅ケア, 27(3), 236-244.
- 友居 和美 (2020). 地域住民が死を考へ死生観を醸成していく過程 社会問題研究, 69, 67-80.
- やまだ ようこ (2000a). 人生を物語る ミネルヴァ書房
- やまだ ようこ (2000b). 死にゆく過程と人生の物語 カール・ベッカー (編著) 生と死のケアを考える (pp.45  
-65) 法蔵館
- 山本 俊一 (1992). 死生学のすすめ 医学書院
- 山崎 裕二・千葉 京子 (2000). 三鷹市民および武蔵野市民の終末期医療在宅ターミナルケアに関する意識調  
査(その1) 同居者との死別経験の実態, 死に対する認識, 終末期医療に対する認識について 日本赤十  
字武蔵野短期大学紀要, 13, 125-143.
- 柳田 國男 (1990). 先祖の話 柳田國男全集13 ちくま文庫
- 吉田 千鶴子 (2010). 高齢者が考えるエンドオブライフ期の迎え方 —エンドオブライフ期への支援システム  
構築をめざして— 豊橋創造大学紀要, 14, 95-110.

## **Literature review on Japanese views of life and death: A study from the perspective of generativity**

**Kazumi Tomoi**

Graduate student, Osaka Prefecture University

### **Abstract**

This paper aimed to clarify, through a literature review, the views of life and death among people far from death and to form a basis for future research. First, a review of the transition of the view of life and death in Japan showed that its characteristics were found in the circular view of life and death linked to the consciousness of inheritance derived from an agricultural society. Next, the studies of the views of life and death of people for whom death is not close were analyzed in six fields (cognition, psychology, religious faith and funeral, life, action and contemplation, and end-of-life care), and we found that, within each field, subjects considered relationships with family and significant others. Based on the idea that one motivation of Erikson's concept of "generativity" stems from an inner desire consisted of "agency" and "communion", our findings indicate that the circular view of life and death is identified as "agency", which emerges as a symbolic immortality, and consideration for one's relationships is identified as "communion", which emerges from being needed by others. Focusing on narrative may encourage the development of views of life and death by creating places to talk about death.

Key Words: views of life and death, circular views of life and death, relationship, generativity, narrative

受付：2020年8月31日

受理：2020年9月18日